

平成 15 年度 科研 基盤研究(B)

研究課題：近代における「考古学」の役割の比較研究 その本質的表象と政治的境界の関連を軸に

研究組織：研究代表者：余語 琢磨 自治医科大学・看護学部・講師

余語 琢磨(39)	自治医科大学・看護学部・講師	文化人類学 考古学	文学 修士	研究統括 インドネシア・日本担当
小川 英文(46)	東京外国語大学・外国語学部・助教授	考古学	文学 修士	フィリピン担当
高梨 修(42)	名瀬市立奄美博物館・学芸員(研究職)	考古学	文学 修士	日本(南西諸島)担当
谷川 章雄(49)	早稲田大学・人間科学部・教授	考古学	文学 修士	日本・韓国担当
寺崎 秀一郎(36)	早稲田大学・文学部・講師	考古学	文学 修士	ラテンアメリカ担当

研究目的：

近年のアジアでは、民族問題や諸国・諸地域の政治的対立が表面化する一方、グローバリゼーションの進行による情報・物質の越境が相互依存関係を飛躍的に深めている。このような変貌に直面し、考古学に隣接する歴史学・社会学等を含めた人文・社会系学問分野では、近代以降に自明のものとしてきた国家・国民・教育・科学等の制度や価値観をめぐる研究姿勢が大きく転換している。その潮流はオリエンタリズム批判・ポストコロニアル批判等に代表され、エスニシティ・マージナル等の共有された分析概念を駆使して、近代の知や権威に対する根本的な疑義を提出している。しかしながらこの動向のなかで、日本の考古学研究者はその学問の枠組みや実践に対する十分な検討を行っているとは言い難い。

当該研究は、考古学および研究者やその対象が、近代以降の諸制度・価値観とけっして無縁ではありえないという前提に立ち、「考古学」の歴史学という視座を提起するものである。研究成果という「表象」の送り手(研究者)・受け手(国民ほか)とそれをとりまく諸状況そのものを研究対象として再設定し、考古学が、過去の物質的痕跡を対象とする研究の性質に依拠して本質主義的・素朴実在論的に「歴史」を再構成することで、「非政治性」を無意識のうちに自然化してきた点を批判的に検証する。具体的には、研究期間内において、日本国内および日本が過去に植民地化したアジア諸地域を中心に、中米を含めた環太平洋地域を対象として、国民国家の形成や植民地経験のなかで考古学がいかなる実践を行い、利用され受容されてきたのかを、研究書、教育、メディア、アイデンティティ、文学などの言説の絡み合いのなかで検討する。その目的は、近代かつ恣意的な国民国家という政治的「境界」設定のなかで、内的には統合領域を正統化する「同一化」、また外的には独自性・固有性を強調する「差異化」が、歴史の実態を隠蔽したうえで新たに「歴史」として創造されていく状況を明らかにし、その本質主義化の陥穽を回避する方向性を探ることにある。

当該研究の特色は、日本の考古学研究者がその困難さゆえに避けてきた構造的または政治的な課題を、あえて「考古学」を素材とした近現代史研究として設定したこと、さらには、特定研究者・機関への批判に陥ることなく、西欧によって構築された近代世界システムのなかにおける「境界」(諸国家・諸地域)にあらわれた様々なレベルでの操作・受容・抵抗のかたちとしての分析を行うために、広く

対象地を選定したことにある。研究者が社会的存在であり、その成果が社会に還元されるべきものである以上、旧態依然たる言説や制度を再生産するのではなく、その実践がどのように規範化されてきたかを解明することも責務である。当該研究の結果として、考古学が表象してきたものに対する反省性と説明責任を明確化することは、混迷を深める現在の世界情勢のもと本質主義的立場から声高に論じる風潮が強まっているなかで、歴史・文化・社会の差異を本質化せずに関係性の視点から再評価し、排他的ではない共同体のあり方をどのように構想できるかという人文・社会系学問の差し迫った課題へのアプローチとして、少なからぬ意義をもつものと考えらる。

このような視座に基づいた国内の研究・討議は一種のタブーともなっているが、坂詰秀一の業績（『太平洋戦争と考古学』）はその数少ない例で、その「植民地・肇国の考古学」を掘り起こす作業は、学問領域内の問題だけに目を向け続ける日本考古学「学史」の認識のあり方に大きな欠落があることを明らかにした。当該研究の国内における位置は、坂詰の研究姿勢を発展的に継承しつつも、より広域な国民国家・植民地経験地域を対象とし、考古学研究が果たしてきた役割とその「境界」の内外に与えた影響を、戦前～現在の諸言説から構造的に読み解くという先駆的作業である。一方、欧米におけるここ数年の考古学出版物には、ナショナリズムや国民国家を主題としたものが急増しており、当該研究はその潮流に触発されさらなる発展を図るものである。

#### **従来の研究経過・研究成果又は準備状況等：**

当該研究は、以前より研究代表者・分担者間で共有されていた問題意識を、この申請にあたって平成13年度より行った数次の打合せのなかで具体化したものであり、現在までに受給した研究費等はない。

#### **<研究の着想に至った経緯>**

たとえば日本の考古学は、明治期日本が西洋の諸制度を導入し近代化を推し進める過程で、西洋の学問体系のひとつとして日本に導入された。当該期の日本の考古学は、領土内の人間をいかなる人種として表象するかという「日本人種論」を課題としていた。日本の領土に新たに編入された「周辺」の沖縄やアイヌ・モシリに住む人間たちの人種論をとおした他者表象のあり方は、そのもの自体の定義を棚上げにして「日本人」との差異を増幅し、周辺を「未開」と「過去」に縛り付けようとするものであった。こうした考古学の課題と所産は、その後の日本が「台湾」「朝鮮」「南洋群島」「満州」「南方」へと膨張する過程でも引き継がれ、領土内の「日本国民」に「完璧な日本人」と「完璧な日本人をめざすことを期待された日本人」の2種類があることを顕在化させるという、「国民」の二重性の矛盾を増幅させた。

一方、フィリピンの例をあげれば、国民国家建設への苦しく長い道のりのなかで、考古学は「インディオス」から「フィリピン人」の創造としてはじまり、スペイン到来以前のフィリピン人とその社会の実像を文献から掘り起こす作業として開始された。さらにその後、考古学は人類学と歩調を合わせながら、フィリピン領土内の諸民族を開化、半開、未開に分類し、キリスト教低地社会を中心とする国家建設に寄与することとなる。しかしフィリピンも「まつろわぬ」周辺としてのミンダナオを抱え、そこに住むイスラーム教徒の国民化の過程における考古学・人類学の他者表象のあり方には、日本との共通項を見出すことが可能である。

また、考古学研究のグローバル化がすすむ現代に視線を移してみると、日本におけるアジア考古学は、その類縁関係を求める観点や、アジアの先史時代を国境を超えた広がりにおいて再構成しようとする観点からのアプローチを行っている。また近年では、これまで日本人が調査できなかったアンコール遺跡群等の文化遺産を発掘し、保存・修復する国際協力事業も盛んになっている。しかしいずれの研究の方向性も「考古学的発見」を目的とし、考古学研究自体を成立させているナショナリズムや国民国家という近代以降の諸制度・価値観に、新たな「発見」を行うという試みはなされていない。

研究代表者および分担者は、従来より、国内の考古学的調査のみならず、アジア・中米などの国外諸地域や、国内においても南西諸島というマージナルな地域において研究を継続してきた。これらの地域を研

究する者にとって、「境界」という政治性がきわめて鋭く表出する現場で研究することの正当性や意味を自覚し説明していくことは、つねに突きつけられる課題である。この問題は、被抑圧者ないしマイノリティ側が自らの存在と権利を主張するために対抗的な「歴史」を「創造」する場において顕在化し、研究者は、その本質主義的な「歴史」の「再構成」に対する姿勢を明確にすることが要求されるたびに、近代以降の恣意的な政治的「境界」設定に依拠する「同一化」「差異化」という歴史の実態の「隠蔽」をめぐるジレンマに直面する。しかしながら、この構造は国民国家全体に共有される問題であって、より潜在化した「創造」と「隠蔽」のあり方を明確にすることが、考古学においても急務であるという点から、当該研究の着想に至った。この着想は、おもに国民国家の成立と統合強化の過程に寄与してきた「考古学」の表象のあり方を、環太平洋地域における事例の比較研究をとおして再考し、新たな考古学の可能性への模索として発展を期するものである。

#### < 研究の準備状況 >

日本国内における研究のいくつかは、すでに数回の打ち合わせを重ねるなかで、研究代表者および複数の研究分担者で総合的に着手している。

後述する研究計画のうち、日本史の検定済高校教科書の記述研究（現在、山川出版・三省堂・国書刊行会など数社の教科書をとりあげ、年次の新しいものから検討中）や、マスメディアの一つである新聞報道の研究（現在、朝日新聞を中心に過去数年分の記事の収集・分析を継続中）に関しては、数次の検討を重ねている。今後研究体制が整備され次第、他の資料に関する収集・分析も順次に本格化する予定である。

また、南西諸島担当者は、所属機関の所在地でもある担当地域に関わるマージナルな視点に関する研究をすでに発表しており、その予察的考察から当該研究への移行はきわめて自然である。

海外調査に関して述べると、いずれの研究者も現地における豊富な調査経験と各種研究機関とのネットワークを有しており、即時に調査を開始できる状態にある。

東南アジアにおける当該研究に関連する考察は、後述の研究業績でも明らかのようにフィリピン担当者より先行的に発表されており、テーマに対する検討は十分に進んでいる。また同担当者は、フィリピン人考古学者と議論を重ねるなかで、フィリピン・ナショナリズムの思想家ホセ・リサールが 19 世紀末ウイーン学派の民族学に傾倒していく過程に、新たな研究テーマを見出している。

インドネシア担当者は、6年にわたる現地の生業に関する調査のなかで、観光人類学の視点に関わる研究成果を発表しており、文化遺産と観光化問題についての十全な知識があるとともに、ジャワ島・バリ島諸遺跡の予備調査も行っている。

中米担当者は、3年間ホンジュラス国立人類学歴史学研究所に勤務して考古遺跡の調査・修復に従事し、コパン・ルイナス村周辺で調査を担当しているコパン・プロジェクトと情報交換を行っている。またグアテマラでは、ホコタン村においてすでに予備調査を実施し、調査候補地の選定を終えている。

さらに、韓国担当者として研究代表者・分担者が選任した研究協力者は、釜山大学への研究留学経験を有し、その期間中に行った伽耶（「任那」）問題に関する研究成果を公表している。

当該研究は、日本の考古学研究のなかではきわめて先鋭的かつ試行的なものであるが、上記の先駆的な研究成果と準備状況をもとに、その発展と統合を企図している。

#### 研究計画・方法：

日本および関連する植民地経験のある国家・地域に関する当該研究のテーマとしては、1. マスメディア（報道・出版の表象）、教科書（教育の表象）、論文および博物館（研究者の表象）とくに日本列島という地理的特性を無意識的に「境界」として設定し、その歴史的な斉一性や特異性、さらには列島という「境界」の正統性や周辺諸地域に比しての優位性（年代観や発展段階を含む）を「創造」する実践や言説を中心に国民と考古学の関係性をさぐるもの、2. 奄美諸島と称される島嶼地域が、琉球文化の北限地域、大和文化の南限地域として二重に設定された「境界」のなかで、つねに周辺化されてきた枠組みをさぐるもの、3. 日韓併合下の朝鮮半島および台湾における日本人学者の調査意識と調査内

容を再整理し、それが当時および現代の日本と現地社会にどの様に受け入れられてきたかをさぐるもの、を核とする。

環太平洋地域に関する当該研究のテーマとしては、4. フィリピンおよびインドネシアにおいて、植民地時代とそれ以降の欧米の諸調査隊の遺跡調査・報告がその歴史を横領した過程、およびアイデンティティを求めて過去をさかのぼろうとする現地社会の近代考古学の成立過程をさぐるもの、5. マヤ文化圏に相当するグアテマラ・ホンジュラス両国にみる先住民の歴史・文化に関する好対照な意識について比較し、ラテンアメリカという「多民族・多文化・多言語国家」のあり方と文化遺産の果たす役割・可能性をさぐるもの、を核とする。

#### <平成 15 年度の研究計画・方法>

1. に関しては、膨大な資料からの詳細な「言説」分析が必要とされるため、考古学を専攻する大学院生に研究補助を依頼して資料の収集と整理を開始する。これと平行して、東京において年間2～3回のワークショップを開催し、研究代表者・分担者全員のほか教育・文化報道などに詳しい研究者などを加えた発表と討議を重ねながら視点の拡大と深化を図りつつ、おもに考古学的実践の成果に関する教育と報道の表象、および国民の受容のあり方についての予察的な研究成果を発表する。企画と運営は、研究代表者が統括する。

2. に関しては、とくに作家島尾敏雄が奄美大島在住時代にヤポネシア概念を提起した点に着目し、ヤポネシア概念の生成と展開についての従来の理解の誤りを指摘しながら、奄美諸島の歴史研究から島尾敏雄が論じようとした国家論を再生しつつ検討する。調査はおもに南西諸島担当の分担者が行い、奄美大島を中心とする。

3. に関しては、かつての「任那」問題や、今日の韓国にある前方後円形墳の問題を、日韓学者はどの様に理解しているのかを追究し、日本の韓国認識、韓国の日本認識の相違点を明らかにする。調査はおもに韓国担当が行い、光州および釜山などの教育・研究機関に所属する現地研究者・学生を対象として、前方後円形墳問題の位置づけや評価とその歴史的背景を探る。

4. に関しては、おもにインドネシアにおいて、著名遺跡の欧米研究者による発見・調査とその成果が、古代文明を「発明」し称揚することで、当時の現地社会の悲惨な現実を「隠蔽」する役割を果たした状況を検討する。また、おもにフィリピンにおいて、ナショナルイズムの思想家の中心的存在であったホセ・リサールの著作と活動の軌跡をとりあげ、アイデンティティを求めて過去をさかのぼろうとする近代考古学の成立過程を明らかにする。調査は研究代表者およびフィリピン担当の分担者が行い、ジャワ島およびバリ島所在遺跡の調査および文化政策に関する植民地政府側の資料収集と、フィリピン現地考古学者との協議などを実施する。

5. に関しては、先スペイン期のマヤ文化圏に相当し、現在もマヤ系諸民族集団が居住しているグアテマラ、ホンジュラス両国のうち、先住民運動が活発なグアテマラをとりあげ、アイデンティティを示す象徴的な存在である文化遺産としての考古遺跡に関する人々の意識を明らかにする。調査は担当の分担者が行い、グアテマラ共和国チキムラ県などを対象地とする。

#### <平成 16 年度以降の研究計画・方法>

1. に関しては、平成 17 年度まで毎年2～4回のワークショップを開催し、引き続き同じテーマにより、日本考古学の代表的な研究の表象のなかに、その規範化された範疇や再生産の過程を明らかにする。

2. に関しては、二重に周辺化されているマージナル地域であることを明らかにしたうえで、交流という視点から奄美諸島自体の歴史回復を図る方途を考察する。予定される調査地域および年度は、沖縄島および周辺諸島、九州地方および東京である。

3. に関しては、朝鮮総督府などの「文化事業」である遺跡調査の意味と、それが戦後の日本・韓国・台湾の歴史観や国民感情に与えた影響を考察し、隣国への新たな歴史認識の形成手段をさぐる。予定される調査地域および年度は、釜山（旧釜山考古学会の活動）、ソウル（旧総督府事業）である。

4. に関しては、おもにインドネシアにおいて、ボルブドゥール、グヌン・カウイ等の著名遺跡が、独立後にジャワ・バリ文化の象徴、観光資源として利用されていく状況を検討する。フィリピンにおい

ては、文化・民族が異種混交する 19 世紀後半の植民地支配下で、考古学が「祖国」の自由と独立を願う「フィリピン人」としてのアイデンティティ確立に与えた影響を検討する。予定される調査地域および年度は、インドネシア共和国ジャワ島・バリ島、フィリピン共和国マニラ・ルソン島北部である。

5. に関しては、グアテマラとの比較対象として先住民運動が不活発なホンジュラスをとりあげ、文化遺産が植民地時代から現代までの国家という枠組みの中でいかに認識され利用されたかを展望する。予定される調査地域および年度は、ホンジュラス共和国・コパン県である。

以上の研究は、ワークショップや研究誌に順次発表する内容をまとめるかたちで平成 17 年度に総括し、その成果を適切に社会に還元する目的から、シンポジウムおよび一般出版物の刊行などを予定している。

**研究業績：**

<p>余語 琢磨 (自治医科大学・看護学部・講師)</p>	<p>余語琢磨「須恵器の色 実験的復元と理化学的分析から見た窯業技術」『古代』第112号, 早稲田大学考古学会, 2002(N.P.)</p> <p>余語琢磨「消費地の様相と編年 古墳と須恵器」『土師器と須恵器』雄山閣, 129-134, 2001</p> <p>余語琢磨「インドネシア・バリ島の土器作り III 北部における生産の様相, および諸生産地の技法的関連について」『土曜考古』第25号 土曜考古学研究会, 161-184, 2001</p> <p>余語琢磨「「もの」をめぐる文化的行為」『観主観性の人間科学 他者・行為・物・環境の言説再構にむけて』(編著) 言叢社, 83-121, 1999</p> <p>余語琢磨「バリ島東部の土器生産と流通 旧4王国の支配地域にみる生業の動態」『古代』第107号 早稲田大学考古学会, 145-168, 1999</p> <p>佐々木幹雄・余語琢磨(他4名, 2番目)「須恵器の発色に関する実験的研究」『日本考古学協会第65回総会研究発表要旨』日本考古学協会, 116-119, 1999</p> <p>余語琢磨「インドネシア・バリ島の土器作り II 東部における製作技術の展開」『土曜考古』第23号 土曜考古学研究会, 107-136, 1999</p> <p>余語琢磨「インドネシア・バリ島の土器作り 伝統的土器の製作技法を中心として」『土曜考古』第22号 土曜考古学研究会, 125-154, 1998</p>
<p>小川 英文 (東京外国語大学・外国語学部・助教授)</p>	<p>小川英文『カガヤン河下流域の考古学調査 狩猟採集民と農耕民の相互依存関係の歴史過程の解明』(編著)平成11~13年度文部省科学研究費補助金(基盤A(2))研究成果報告書, 2002</p> <p>小川英文「狩猟採集民と農耕民の交流 - 相互関係の視角」『交流の考古学』(小川英文編)朝倉書店, 266-295, 2000</p> <p>小川英文「総論 交流考古学の可能性」『交流の考古学』(小川英文編)朝倉書店, 1-20, 2000</p> <p>小川英文「ナショナリズム」『用語解説 現代考古学の方法と理論 III』(安斉正人編)同成社, 187-198, 2000</p> <p>小川英文『ラオ貝塚群の発掘調査 - 東南アジア島嶼部先史時代の考古学的調査』(編著), 文部省科学研究費報告書, 2000</p> <p>小川英文「考古学者が提示する狩猟採集社会イメージ」『民族学研究』63(2), 192-202, 1999</p> <p>小川英文「東南アジア 発掘の歴史と考古学の課題」『東南アジアの華 アンコール・ポロブドゥール』(吉村作治編)平凡社, 74-89, 1999</p> <p>Ogawa, H. Problems and Hypotheses on the Prehistoric Lal-lo, Northern Luzon, Philippines - Archaeological Study on the Prehistoric Interdependence between Hunter-Gatherers and Farmers in the Tropical Rain Forest - 『東南アジア考古学』18, 123-166, 1998</p>
<p>高梨 修 (名瀬市立奄美博物館・学芸員)</p>	<p>高梨 修「ヤコウガイ交易の考古学 糸良~平安時代並行期の奄美諸島・沖縄諸島における島嶼社会」『交流の考古学』(小川英文編)朝倉書店, 228-263, 2000</p> <p>高梨 修「いわゆる兼久式十器と小湊・フワガネク(外金久)遺跡出土土器の比較検討」『奄美博物館シンポジウム サンゴ礁の島嶼地域と古代国家の交流資料集』奄美博物館, 1999</p> <p>高梨 修「名瀬市小湊・フワガネク(外金久)遺跡の発掘調査」『鹿児島県考古学会研究発表資料 平成10年度』鹿児島県考古学会, 1998</p> <p>高梨 修「奄美におけるグスグ研究のパーспекティヴ」『南日本文化』30, 1997</p>

<p>谷川 章雄 (早稲田大学・人間科学部・教授)</p>	<p>谷川章雄「江戸の胞衣納めと乳幼児の葬法」『母性と父性の人間科学』コロナ社, 85-105, 2001          谷川章雄「江戸の火葬墓」『歴史と建築のあいだ』古今書院, 367-375, 2001          谷川章雄「近世墓標の普及の様相 新潟県佐渡郡両津市鷲崎, 観音寺墓地の調査」『ヒューマンサイエンス』14(1) 早稲田大学人総研センター, 22-31, 2001          谷川章雄「江戸の生活史と考古学」『民衆史研究』57 民衆史研究会, 39-54, 1999          谷川章雄「発掘された江戸の庭園」『日本造園学会誌 ランドスケープ研究』61(3), 218-222, 1998          谷川章雄「近世都市江戸の考古学の課題」『発掘が語る千代田の歴史』千代田区教育委員会・区立四番町歴史民俗資料館, 44-49, 1998</p>
<p>寺崎 秀一郎 (早稲田大学・文学部・講師)</p>	<p>寺崎秀一郎「コパドール多彩色土器の再検討」『史観』第146冊、早稲田大学史学会, 66-86, 2002          Terasaki, S. Un Estudio sobre el Grupo Residencial en el Sitio El Puente, Honduras: Informe Preliminar de la Operación XI. En el Archivo de Departamento de Investigaciones Antropológicas, Instituto Hondureño de Antropología e Historia, Tegucigalpa, Honduras. 2001          寺崎秀一郎「複雑化する社会 - 古典期マヤの人, 都市」『村落社会の考古学』(高橋龍三郎編)朝倉書店, 287-312, 2001          寺崎秀一郎「古典期マヤの葬制」『早稲田大学會津八一記念博物館研究紀要』第2号 早稲田大学會津八一記念博物館, 17-36, 2001          寺崎秀一郎『図説 古代マヤ文明』(著) 河出書房新社, 1999          寺崎秀一郎「古典期マヤ政体の拡大 - 南東マヤ地域を例として」『史観』138号, 早稲田大学史学会, 66-85, 1998          寺崎秀一郎「序章 メソアメリカ文明, 興亡の三年」『マヤ・アステカ 太陽の文明』平凡社, 6-24, 1998</p>